渋沢栄一の社会事業

渋沢栄一は、その後半生では、教育事業ばかりでなく、長く院長を務めた東京養育院や聖路加病院の設立、日本の結核予防協会の設立など、社会事業方面においても多数の功績を残しています。

【東京養育院】（現・東京都健康長寿医療センター）

現在、板橋区栄町にある東京都健康長寿医療センターには、渋沢翁の大きな銅像があり、その横には「養育院本院の碑」があります。碑を読むと、養育院は維新後急増した窮民を収容保護するために明治 5 年（1872）10 月 15 日に創設されたとあり、創設から現在に到るまでの歴史がわかります。

明治初期の東京では職を失った旧士族や貧しい人たちが徘徊していましたが、ロシア皇子が来日するこが決定して、その人たちを、旧加賀藩邸（現・東京大学）の長屋に収容することになったことが、養育院設立のきっかけとなりました。

渋沢翁は、明治 7 年（1874）から運営に携わり、その際には、江戸時代の基金である「七分積金（しちぶつみきん）」が用いられました。これは寛政の改革を実行した老中松平定信が始めた制度で、幕府崩壊後は東京府に移管されていました。栄一が会頭を務める東京会議所にこの基金の活用が任され、養育院はその使い途の一つとなったのです。

栄一は、養育院の院長に就任し、亡くなるまでその職を務めました。養育院は本郷、浅草、上野（現・東京芸大）、神田、本所、大塚（現・都立大塚病院）と移転を繰り返しましたが、最終的に現在の板橋区栄町に至りました。

栄一は、どんなに忙しくとも月 1～2 回は来院し、入院者と交流をしたそうです。しかし、公金を使って貧窮者を助けることに反対し、廃止を求める声もありました。栄一は、「困窮者を助けることは、社会にとって必要な義務である」と強く訴えて、その後も多くの困窮者を救ってきました。

栄一の意思と努力により、養育院は継続し、時代の求めに応えた医療・福祉事業を展開していきました。精神病・ハンセン病・結核・児童福祉・高齢者福祉対策などのさまざまな専門施設が養育院から生まれました。

養育院は平成 12 年（2000）に廃止され、事業は都庁の福祉保健局に引き継がれました。養育院の付属施設だった東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所は平成 21 年（2009）に合併し、東京都健康長寿医療センターになりました。センター内には、栄一の半世紀を超える尽力を記念して、「養育院・渋沢記念コーナー」が設けられています。

【聖路加病院】（現・聖路加国際病院）

トライスラー記念館　提供聖路加国際病院

栄一は、「できるだけ多くの国民が医療にかかることができるように」という思いから、医療福祉機関に対しても多額の寄付を行っています。その中でも、特に関わりのあるのは、東京・築地にある聖路加病院（現・聖路加国際病院）です。明治 34 年（1901)にアメリカ聖公会の宣教医師ルドルフ・B・トイスラーが創設しました。

大正 3 年（1914）聖路加病院、国際病院設立計画評議員会が成立し、会長に大隈重信、副会長には栄一が選任されました。大正 12 年（1923）関東大震災や大正 14 年（1925）の火災で被災した際には支援を行っています。また、昭和 3 年（1928)には病院の事業を拡張するため、栄一たちの説得でアメリカの支援者から寄付金が集まっています。

そのほかにも、「日本の細菌学の父」として知られる北里柴三郎の提唱で大正 2 年（1913)に設立された日本結核予防協会でも副会頭を勤めるなど予防医療にも取り組み、結核の撲滅にも貢献しました。

このように渋沢翁は、実業家として得た財産を積極的に社会に投じ、近代日本の福祉や医療分野を育みました。弱者に寄り添うその姿勢は、功利だけではない栄一翁の人柄を今に伝えます。